特別支援学校の「自立活動」におけるダンス活動の可能性

－自閉症児に着目して－

伊藤　未唯　（　筑波大学大学院　）

１．目的

自閉症児は人間関係の障害特性が顕著であり、社会に出る前の教育現場で人間関係について指導する必要がある。そのため、特別支援学校に設けられた指導領域である「自立活動」とその指導内容である「他者との関わりの基礎」に着目する。その指導として、現場で多用されているダンスと、自閉症児の指導として重要である模倣（佐藤ほか、2007）を組み合わせ、身体表現を伴い他者と共感・交流することができるダンス（模倣活動）が有効ではないかと仮説を立てた。

そのため、特別支援学校の「自立活動」の指導実態を捉えるとともに、教員の「他者との関わりの基礎」の捉え方について明らかにする。そして、「自立活動」でダンス（模倣活動）が活用できるか、その可能性を探ることを目的とする。

２．研究方法

１）対象者：「自立活動」の指導に定評のある教員６名を選定。

２）調査方法：対面とオンライン会議ツールZoomを活用した半構造化インタビュー。

３）分析方法：グラウンデット・セオリー・アプローチを参考に分析。

３．結果と考察

１）　「自立活動」では、個別指導を行う環境が整っていないこと、就労や進路実現が優先されている実態が明らかになった。

２）　「他者との関わりの基礎」では、コミュニケーションが重要視されていることが明らかになり、その指導としてソーシャルスキル・トレーニング（以下、SST）の実践が行われている。しかし、会話の形式を教えることに留まり、人間関係で重要である相手を認め、気持ちを込めて発言することまで指導できていない可能性が示唆された。そのため、SST のような指導だけに留まらず、ダンス（模倣活動）で身体と身体を通したコミュニケーションに立ちかえり、他者との関りを学ぶ機会も必要である。

３）　自閉症児を対象に「自立活動」でダンス（模倣活動）を行うことについては、自閉症の障害特性によっては模倣活動が困難な可能性も示唆された。

また、対象者の中には模倣を忠実にさせることを活動の目的と捉え、その背景にあるダンス（模倣活動）を行う意義を理解できていない可能性が示唆された。

４．結論

ダンス（模倣活動）は現場の指導方針と異なる部分があり、現段階で取り入れることは難しいことが明らかになった。だが、SST で会話の形式について指導していくだけでなく、ダンス（模倣活動）を活用して自分の身体と他者の身体を通した基礎的なやり取りを学ぶことも必要である。

５．主な参考文献

１）文部科学省（2018）特別支援学校教育要領・学習指導要領解説　自立活動編（幼稚部・小学部・高等部）．開隆堂出版：日本.

２）佐藤克敏・涌井恵・小澤至賢（2007）自閉症教育における指導のポイントー海外の４つの自閉症指導プログラムの比較検討からー．国立特殊教育総合研究所研究紀要，34：17-33.